

## 地図帳の活用② 「世界の諸地域」編

元全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫

### その一 地図(地図帳)を学ぶ 地図(地図帳)で学ぶ

前号のトラの巻⑬では「地図帳は社会科の『辞書』』として、地図帳を開く習慣を身につけることや地形の読み取りの留意点などを示しました。今回は世界地誌における一般図・主題図そして絵図の活用について示したいと思います。

私は大学の社会科教育法の講義において、教材研究の在り方として「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ということを学生に話します。先生方の中にも聞いたことがある方や教育実習に来た学生に話す方がいらっしゃるかと思います。教科書に書かれている内容や資料を解説するだけでなく、教科書の内容や資料から社会的事象の意味・意義を読み取り、社会的な見方・考え方を養うことが社会科授業の本来の姿であることを示した言葉です。

この言葉を地図(地図帳)におきかえると、「地図(地図帳)を学ぶ」とは、地図(地図帳)活用の第1段階として地図記号や地形の段彩等から地理的事象を読み取ることです。何が、どこで、どのように、位置(場所)、距離(長さ)、分布(広がり)など、地理的見方の基礎を学ぶ活動です。これ自体は基礎的なスキルを身につけるために重要な活動です。しかし、地図(地図帳)の本来の目的は、地図(地図帳)に示された抽象的表現を読み取り解釈し、地域の地理的事象とその要因、背景、さらにそこで生活する人々の営みを読み取ることです。これが「地

図(地図帳)で学ぶ」ということです。

このことを、ヨーロッパ州を事例として確かめましょう。まず『中学校社会科地図』(以下、地図帳)p.45~46を大観して緑色=低地が大きく広がっていることを読み取ります。低地の広がりをp.45の左下に示されている同緯度・同縮尺の日本(東日本)と比較することで、その広がりをイメージさせます。次に茶色に注目します。アルプス山脈を中心としてヨーロッパ南部に茶色=山地・山脈が広がっていることを読み取ることができます。やはり日本の図と比較し、山地・山脈の東西南北への広がりをイメージさせます。次に国際河川であるライン川、ドナウ川を河口から指でなぞらせます(図1)。なぞる際は日本の図と比較しながらその長さ、それぞれが複数の国を流れていることを読み取ります。

続いてp.47~48の拡大図を活用して上記の読み取りを深めます。標高を読み取ると、アルプス山脈には4000m前後の高い山が見られますが、他にはここまで高い山の連なりは見られません。ヨーロッパの地形の特色を理解するためには、けわしいアルプス山脈とふもとの湖、中央部の大平原、フィンランドの湖沼群、ノルウェーのフィヨルドなど、それぞれの写真を活用しながらその成因である氷河による地形についてふれましょう。それにより後の農業の学習も深まります。ライン川とドナウ川については、ライン川支流のメイン川とドナウ川が運河でつながっていることで総延長4000km以上にも及ぶ航路となっており、複数の国を結ぶ国際河川として

の実態に気づかせましょう（参照：『地理シリーズヨーロッパ州①』p.8～9）。

さらにブリュッセルを中心に半径400km（50mm）の円を描いてみましょう。するとその中にロンドン、パリ、ルクセンブルク、アムステルダムといった主要都市が入ります（図1）。東京を中心に半径400km

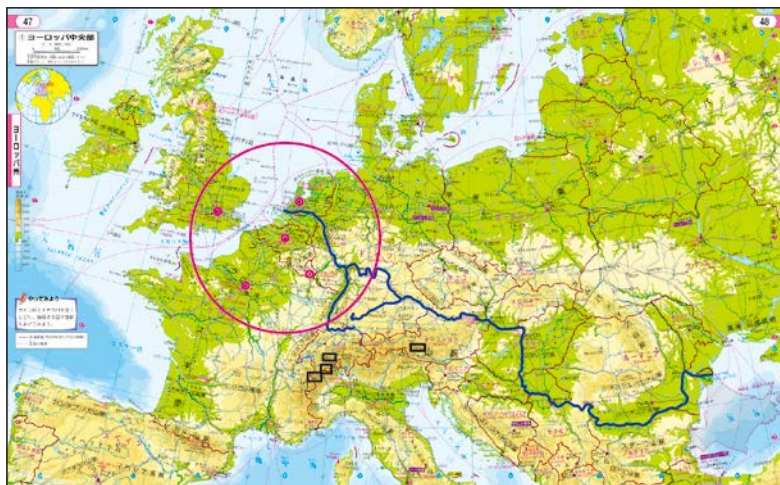


図1 『中学校社会科地図指導書 スタートアップ編』p.28（実際の紙面を縮小しています）

の円を描くと仙台、新潟、名古屋、京都、大阪などが入ります。この作業を通してEUの本部がブリュッセルにある理由を推測することができます。

以上のように一般図の読み取りは、地理的事象の読み取りに一手間加えた作業を行ったり日本の事象と比較したりすることで地域のイメージが深まり、人々の営みが見えてきます。

#### ポイント①



一般図の読み取りは、一手間の作業を行うことと日本の事象との比較をすること

### その二 年降水量と季節による農作物の違い

気候の学習では、一般図で地形の特色を読み取るとともに、一般図、気温・降水量の主題（資料）図、雨温図を組み合わせる特色を読み取る活動が行われます。また地図帳p.11～12「世界の気候」と前ページの「世界の地形」とを照合し、同じ州でも地域によって気候が異なることを見だし、州の気候の特色を明らかにします。

気候の特色と農業との関連の学習においては、よく地図帳の主題図が活用されます。このときに留意すべきことは、季節による降水量の違いと農作物との関係です。地図帳p.11「③1年間

の降水量」の図では、東南アジア・南アジアは年降水量が多い地域として示されています。しかし地図帳p.22「③気温と降水量」の図を見ると、1月と7月の降水量に大きな違いが見られます。サバナ気候の雨季と乾季の特徴とともに米が栽培される季節に気づかせたいものです。また、インド北部は雨の少ないステップ気候で、世界的な小麦栽培の地域であることを地図帳p.39「②南アジアの米と小麦の生産」の図で米の栽培地域とともに確認しましょう。そしてヨーロッパ州では、地中海性気候と地中海式農業（かんきつ類の栽培と冬の雨による小麦栽培）との関連の説明に、季節による降水量の違いを読み取るための雨温図が必要です。図やグラフの読み取りの基礎的技能的育成を図るためには、気候と農業との関連に限らず複数の資料を組み合わせる一つの事象や概念を読み取る活動が大切です。

#### ポイント②



気候と農作物との関連は、複数の資料の組み合わせで読み取ること

### その三 主題（資料）図の読み取りと活用

若い先生方へ地図帳の活用について聞くと、一般図と気温・降水量を示した主題図は活用の

頻度が高いのですが、農業や工業に関する主題図はあまり活用されていないようです。その理由は、情報量が多く、生徒に読み取らせにくいいため、より簡易に見える教科書や資料集の図を活用しているとのこと。

ヨーロッパ州の工業を事例に考えると、ライン川・ドナウ川などの国際河川、その河口のロッテルダム、さらにはおもな工業都市名を読み取るために、地図帳の活用が必要です。また地図帳p.53「②資源・鉱工業」(図2)を活用して、『社会科 中学生の地理』(以下、教科書) p.60~61「西ヨーロッパを中心に発達した工業とその変化」に示されている、石炭や鉄鉱石による鉄鋼業から石油を資源とする石油化学工業、さらには自動車、航空機へといったEUの工業の変化を、それぞれの記号とおもな資源の移動、工業都市とを関連づけて読み取らせることがEU統合の歴史を理解させるうえでも大切です。また、航空機については地図帳p.53「②資源・鉱工業」で、「エアバス社のおもな工場」の凡例を読み取り、教科書p.60「②エアバス社の国際分業のしくみ」と本文とを照らし合わせながら、EUの工業の特色でもある国際分業について理解させましょう。さらに発展課題として、自動車の生産地がドイツ・フランス・イタリアからスペイン・ポーランドなどへも広がっているのはなぜか?を、地図帳で具体的な工業都市名を確認しながら考えさせます。p.53「①工業生産額」の図を見ると、スペインの工業生産額は主要なドイツ、フランス、イタリア、イギリスに次ぐ額となっており、スペインの工業の発展が読み取れます。

地図帳p.159の巻末統計資料ではスペインの主要輸出品は自動車などとなっています。ここでドイツ、フランス、イタリアには有名な自動車メーカーがありますが、スペインには存在しないのになぜ?という疑問が浮かびます。この疑問を解くには地図帳p.53「②資源・鉱工業」と教科書p.57「④ドイツに住む人がEU加盟国内でできることの例」及び本文の13行目、教科書p.61「⑥EU諸国における1か月あたりの最低賃金の比較」のグラフとを照合することで、EU統合により工業製品に関税がかからないことや安い人件費を求めて日米欧の自動車メーカーが進出し



図2 『中学校社会科地図』 p.53 「②資源・鉱工業」



たことなどがその理由として考えられます。しかし近年は、さらに人件費の安い東ヨーロッパへの自動車工業の進出による失業者の増加などの課題も出てきました。これらの読み取りからEU全体の工業の変化と課題等を浮き彫りにできます。

このように、教科書本文の内容の根拠として複数の主題図を組み合わせて関連を考える活動

が必要です。主題図はトラの巻⑥で示したように主題(テーマ)に沿った情報のみを集めたものであるため、総合的に考えようとする場合は複数の主題図を組み合わせる作業が必要なのです。

**ポイント③**



複数の主題図を組み合わせて  
関連を考える

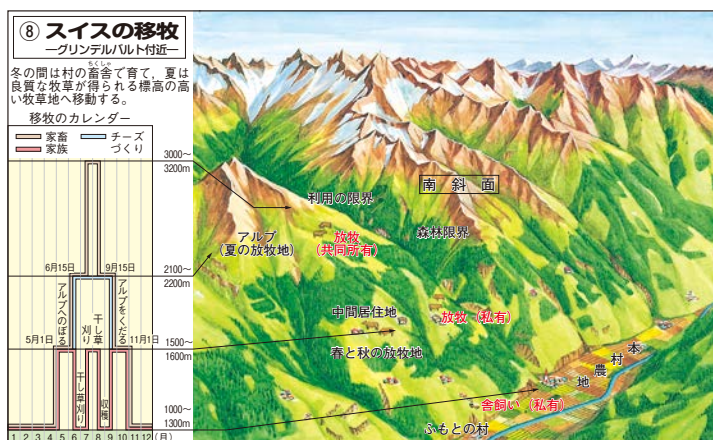


図3 『中学校社会科地図』 p.50 「⑧スイスの移牧」

②で混合農業等の地理用語の概念認識の重要性を示したように、混合農業をきちんと理解させるために活用したい絵図です。この絵図を活用して混合農業のしくみを理由とともに理解させたいものです。そして「⑩ギリシャの地中海式農業」の絵図では、かんきつ類とオリーブ・ぶどうの栽培地域が分かれていることに着目しましょう。オレンジ色の線で囲まれたかんがい農地でかんきつ類が、その外側でオリーブ・ぶどうが栽培されていることがわかります。夏の乾燥に強い作物でも必要な水分量は違うのです。地中海式農業の実際の営みを実感させたいものです。

このように絵図の意図を読み込んで活用することで、その地域の営みが見えてきます。なお、絵図に示された地名(グリンデルバルトなど)は地図帳p.50「⑥農業地域」の主題図の中に位置が示されているので、確認させましょう。

**ポイント④**



絵図はその意図を読み込んで  
活用すること

今回はおもにヨーロッパ州の事例を示しましたが、これらは他の単元でも応用できます。今回は日本の諸地域での活用法をお話しします。

〈参考文献〉

『地理シリーズ 世界の国々③ ヨーロッパ州①』帝国書院(2012年)

**その四 絵図の読み取りと活用**

地図帳には鳥瞰図をはじめ具体的な風景を思わせる絵図が掲載されています。主題図に比べ具体的である分、よく活用する先生とほとんど活用しない先生とに二分されるようです。見ればわかるという思いから絵図が示している意図を読み取っていない活用がなされているのではと心配されます。そこで地図帳p.50のヨーロッパの農業にかかわる三つの絵図を例にその意図を読み取ってみましょう。まず「⑧スイスの移牧」(図3)の絵図からはアルプの語源、「移牧のカレンダー」からはアルプで生活するのは夏の1か月だけで、中腹には中間居住地もあり、半年はふもとの村で過ごすなど、移牧を営む人々の暮らしを読み取らせましょう。このような暮らしは「アルプスの少女ハイジ」でも描かれています。次の「⑨ドイツの混合農業」は、トラの巻